

# 郷土あれこれ

郷土館だより  
第 22 号

五日市町立  
発行 五日市町郷土館 東京都西多摩郡五日市町五日市920-1 電話 0425・96・4069 有線4607

## ぐんどう 軍道のギリシャ正教



軍道の教会に掲げられたアイコン(聖画像)

### セントニコライ 1) 五日市聖尼格頼教会

五日市の市街地から西へ約6軒ほど入った谷合、秋川の支流養沢川のほとりに軍道ぐんどうと呼ばれる集落がある。明治22年まで乙津村、以後昭和30年まで小宮村に所属し、現在は合併により五日市町大字乙津となる。現在70余世帯を数えるが、明治期の戸数は43戸。家は川端から、山麓の南斜面をはい上るように散在している。

明治大正時代、ここにギリシャ正教を信奉する一団が生まれ、五日市聖尼格頼教会セントニコライと称する会堂(民家の一部を改造したもの—乙津1873)も建てられた。

日本正教会発行の正教新報365号(明治29・2・15)に八王子正教会の清水伝教士が軍道を訪れた訪問記がある。

時は同年1月16日で、まだ降誕祭(ギリシャ正教では1月7日)の素朴な緑門アークがそのまま飾ってあった。「当地の信徒は霊体共に健全にして頗る愛らしき教会なり。」と述べ、温厚朴直な風をたたえている。商業地のため利にきとく、物質的で宗教心に乏しい八王子地区とは「雲泥の差」とも記している。「該会は信徒総数僅かに40名にすぎざれども、各自信仰を維持し、互いに一致和合している。一会務はパウエル栗原うらなる人万事周旋の労をとる。」このパウエル栗原が後述する栗原豊吉氏で、教会は彼の自宅であった。清水伝教士が到着した夜、早速29名の婦人が集まり説教を欣聴し1人の倦む者なく、教話中など頗る厳肅を保った。彼は5泊し祈祷説教を行ったが、信徒は用事をさし置いても集まり、教理の質問をするという風であった。ただ残念なことに道が悪く、不便をきわめ、「腕車(人力車)あれど高価にして乗ずる能わず、巡回不都合は甚だ遺憾」と記している。これを見ると神父や伝教士の来訪も稀で、それだけ久々の訪れが渴望されていたとわかる。清水氏は「目今の処、同地には新聴者なきも信徒は悉く信仰を維持して将来多望なり」と報じているが、それは専ら豊吉氏の熱意と努力によるものと思われる。

### 2) ギリシャ正教とは

ギリシャ正教は東欧(主にロシアやギリシャ)を地盤とするキリスト教で、ハリストス正教ともいう。ハリストスはイエスのことで、正教はオーソドックス(正統派)の意である。ギリシャ正教はローマ・カトリックやプロテスタントよりキリスト教の古いしきたりを守り、儀式も厳かに行う。駿河台のニコライ堂に象徴されるような円屋根ドームの教会を建て、「アイコン」と呼ばれる聖画像を教会や信者の家に掲げる風をもつ。

幕末の開港（1858）で函館にロシア領事館が設けられると、ここに司祭ニコライが派遣された（1861）。当時日本は禁教令下にあり、宣教師は外人居留者のためのものであるが、内々布教も行なわれたとみえる。東北地方にハリストス正教が芽生え、明治元年（1868）にはニコライより密かに洗礼を受ける者も出た。ニコライは明治2年に東京神田の駿河台に本拠をかまえ、以来50年間布教に従事した。ギリシャ正教（ロシア系）の日本布教はニコライを措いては語れない。

ところで明治政府は幕府の禁教政策をうけつぎ、隠れキリシタンの摘発まで行い諸外国の非難を浴び、明治6年漸くキリシタン禁令の高札撤去を認めた。五日市憲法草案起草者として五日市に馴染みの深い宮城県人千葉卓三郎はかねてギリシャ正教に関心を寄せていたが、明治6年信仰上の先輩酒井篤礼にとまなわれて上京、ニコライの手により洗礼をうけ千葉ペートルと名乗った。彼は郷里において熱心な布教活動を行い明治7年酒井とともに逮捕監収されている。卓三郎は片ピン片眉をそり落され、鉄鎖につながれ3か月の苦役に服させられた。外に対しては信仰の自由をよそおい、内にあつては弾圧を繰返す卑劣な権力に対する憤りが卓三郎を民権運動→憲法作成に駆りたてたと推察される。ギリシャ正教に限らず明治初年のキリスト教は自由平等を目指す民権運動の土壌となり、封建意識を解き放つ開化の尖兵ともなった。

### 3) 信仰のはじまり

なぜ、五日市の西の谷間にギリシャ正教の火が<sup>とも</sup>点つたのだろうか。この件に興味を抱かれた日本ハリストス正教横浜教会の石動神父より正教会出版物のご提供をうけたので、とりあえずこの資料を手掛りに考察をすすめてみる。

まず教会報知21号（明治11年12月1日発行）に、八王子近在を巡回伝導したイラアン山瀬氏の報告として「教ヲ望ム者数ヶ所ニアリ、其内目的アル所（有望な所の意か）2、3ヶ所ヲ掲グ○五日市ニ4名アリ、2名ハ小学教師ナリ○乙津軍道村ニ3名内1名ハ当年7月本会ニ行キシ栗原豊吉ナリ」とある。これによると軍道の栗原豊吉氏はこの年の7月に駿河台の正教会を訪ねている。彼を駿河台に誘う動機となったのは、五日市勸能学校教員の宮城県人連との接触が考えられるが、当時ニコライ神父もしばしば八王子迎を訪れていた<sup>しもいちぶ</sup>ので、ここでの直接の<sup>しもいちぶ</sup>邂逅も考えられる。明治11年10月には八王子在の<sup>しもいちぶ</sup>下一分<sup>セントマリア</sup>方村に<sup>しもいちぶ</sup>上卓樹らの働きでカトリック系の聖瑪利亞教会

も建てられた。栗原豊吉氏（1846、弘化3—1929、昭和4）は当年32才。彼のその後の軌跡をみると徹底した宗教型人間である。「時代が彼を新しい神のもとへ誘った」と書いても大きな誤りではあるまい。ところで五日市4名うち2名の小学教師は誰か。当時の勸能学校責任者は宮城県人永沼織之丞で、彼はギリシャ正教と無縁の人物ではない。（後年入信している。）例の千葉卓三郎についてみると、明治8年上京、横浜東京を経て明治11年には秋川谷に入っている（大久野、草花、川口等の小学校勤務）。五日市に転住し勸能学校に勤めたのは明治13年4月よりであるが、秋川谷の何処かにいたとすれば聴講の可能性なしとしない。ただ当時の卓三郎の関心は民権運動に傾き、ギリシャ正教をみる目は別れた恋人を見るさめた目付になっていたのではあるまいか。

### 4) 五日市ニコライ教会の盛衰

正教会資料に明治14、15両年の「公会議事録」があり、各教会の「景況表」に五日市・軍道地区の状況がうかがえる。

14年に仮会堂新築、信者35名、領洗者31名、聴講者100余。15年に信者45名、洗礼11名、聴講者50余とある。これは当時の八王子教会をはるかに凌ぐ数字である。そして洗礼者数の多いことが明るい将来を予測させている。もっともこの「景況表」は五日市と軍道の合計数で、軍道の信者は豊吉氏の教会に集まり、五日市の信者は町内の信者宅に設けられた講義所で集会をもった。なお明治15年2月1日正教新報28号は「旧臘五日市教会にて執事5名栗原、平塚、土屋、千葉、栗原を選ぶ」と報じている。この内栗原の1人は豊吉氏と判断される。千葉姓は当地にないので卓三郎か、或いは同郷の千葉吾一（ギリシャ正教受洗者で当時五日市在住）ということになる。憲法作成の熱気さめやらぬ卓三郎より吾一の公算が大きい。

資料は次に前掲の明治29年正教新報365号に移る。この記事は軍道教会訪問記であるが、一心同体の五日市地区を無視しているのは同地区の景況不振の証拠であろう。理由は想像がつく、先ず豊吉氏のような核になる信者のいないことと、今1つはカトリック教会の進出である。下一分方の聖マリア教会のテストヴィド神父が五日市の名望資産家内山安兵衛を信者としている（西田佐市『叙階五十年を生きる』）。安兵衛の入信（明治20年前後と推定）は当時評判だったらしく、洗礼をうけた秋川の淵が今もヤソ淵と呼ばれている。彼は邸内に教会を建て、家

族と使用人を中心とした信徒集団をつくり当地区カトリック信仰の草分となった。

最後の提供資料は大正4年の議事録である。これには五日市、軍道を合せ信徒数52、戸数10、洗礼者小2とある。この数の大半が軍道地区のものとしても頽勢はおおえない。洗礼者の子供2名は信者の家族であろうから、先細りの景況にあることがうかがえる。

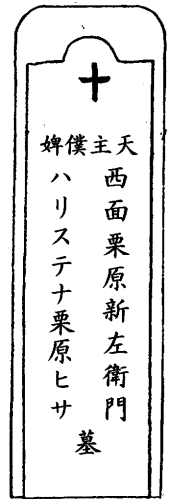
さきの石動神父によると豊吉氏は明治33年の記録に「伝教補助」とあり、これには若干の養成期間が必要ならずという。彼はその間家業を放棄し、妻子を置き上京していたことになる。またニコライ堂の建設にも多額の寄付を寄せているという。これはどういうことであろうか。軍道地区の生業といえば男は山仕事（山林労務）、女は養蚕ときまっている。また一部の人が和紙作りに従事していた。畑は猫額大の傾科地でささやかな食料生産の他は桑・楮（和紙原料）が植えられている。多少とも余裕のある家は山林所有者であるが、それは全戸の1割にも満たない。幸い豊吉家はその1割に入っていたらしい。しかし資産のある家ほど日常の生活をつましくして勤儉節約家業に励み、資産を守り次代へ譲ることを心掛けるものなのである。この点豊吉氏は全く異端の人であったが、家長権絶対の時代であるから家族は家長の信ずるところに従い洗礼も受け、家長の不得手な実業の道に励んだ。豊吉氏にとって最も大切な神（信仰）の次元で考えれば家運の傾き、家族の犠牲も相対的な問題であったろうが、大事な宗勢の上で不運な事態が発生した。それは日露戦争の勃発で、正教集団は愛国的な山人の目に敵国ロシアの宗教を奉ずる人々と映った。豊吉さん達は益々孤立化を深めることになった。

## 5) 習俗と信仰—墓を訪ねて

軍道のギリシャ正教は新たな信者をふやすことなく古い信者の死によって自然に幕を閉じた。豊吉さんはつぎつぎに同志を見送る立場にあったが、昭和4年83才の生涯を閉じた。豊吉さんの葬儀の日軍道地区の人々は久しぶりに神父さんの姿をみた。

いま、旧信者のお宅を探し、ようやく5軒ほど見当付けることができた。その多くが上軍道に集中していて、地縁的にもきわめて近い間柄にあったことがわかった。山村の家々はみな内墓をもっているのが旧信者の内墓をお訪ねし、3か所の墓地に明瞭な信仰の跡をみた。（お墓の探求は五日市在住のカトリック信者海老名幹雄、山本学両氏がなされた。）

### イ) 栗原四郎家（豊吉氏の家）



#### 栗原豊吉氏の両親の墓

図のような墓石があるが、これは豊吉さんの両親の墓で、西面はシメオンと読む。ハリステナとともに洗礼名である。側面に栗原豊吉建之とある。豊吉氏が両親を説得し信徒にしたものであろう。豊吉氏自身の墓はない。

### ロ) 栗原隆子家



写真は隆子さんの祖父清八氏（大正3年没）が両親と叔母(?)のために建てたものらしい。荒涼とした山裾の墓地に「久羅女」（明治14）、「神婢伊利奈」（明治16）等の文字がエキゾチックな神秘性をただよわせていたが、清八氏の墓はない。祖母ゲンさん（清八夫人）は昭和2年になくなったが、その葬儀の日の記憶が隆子さんにある。神父さんがみえ、木の十字架が立てられ、削った正面に「神婢ヨアンナ」と書かれていたという。いま隆子家の内墓に山石が二個置いてある。やや大き目の清八氏、幼児の頭位のがゲンさんである。

#### ▲清八氏両親 ▼神婢伊利奈



## ハ) 栗原清吉家



### ペートル栗原重次郎墓

前記栗原四郎家には豊吉さんの孫顯氏（故人）と結婚（大正15年）したスエさんが健在である。スエさんは晩年の豊吉さんと生活を共にした。「おじいちゃんはいつもおれは死んだら天国にゆくんだから墓はいらない。墓参りもしなくてよい」とスエさんは語る。キリスト教の教義は「神の国において永遠の命を得る」という考えを軸に展開する。豊吉さんの生涯も正にその為であったのだ。死後地上に残されたものは脱殻にすぎない。ところが日本の習俗では遺骨や墓所を大切に<sup>りんね</sup>する。墓は輪廻転生する霊の基地である。祖先の霊は墓に留まり、お盆には家に招かれ子孫と交わる—これは千年の歳月が醸成した習俗である。豊吉さんも清八さんも自分の両親の墓を立派に造っている所をみると日本の伝統意識が働いているように思える。或は我子への愛情から伝統習俗を断って改宗した両親への感謝のはなむけということであろうか。

明治初年この陸の孤島にギリシャ正教が入り込み一まず定着をみたのは、当時の文明開化の風潮に負うところといえるが、今一つ廃仏毀釈の嵐も見落せない。養沢川流域は特殊な事情もあつて、文字通り嵐と呼ぶ状況であった。これは伝統習俗同志の痴話喧嘩にも等しい争いだが、キリスト教が進出し易い空白状況も作った。世の中が落つきナショナリズムのうねりが昂まるにつれ、正教徒への風当りは強くなった。「仏壇も神棚も置かない家」への周囲の目がきつくなった。豊吉さんの孫顯氏は子供の頃ひどいイジメに泣いたという。「おじいちゃんには悪いけれど、もう御免だと思った」とスエさんは亡きご主人の言葉を語る。ロシア風に伸ばしたアゴ髭の白くなっ

写真の墓は70糎ほどの自然石（石灰石）で、十とペートル栗原重次郎が鮮やかに読みとれるが、没年等は刻まれていない。ご当主清吉氏の4代前の曾祖父に当る方と推察されるが、近年つくられた墓碑にその名はない。清吉氏はこの件につき言葉少なかった。

た豊吉さんは家族からも孤立してしまった。ある日スエさんは豊吉さんから卵30程買ってくるように頼まれた。豊吉さんは一人でその卵に十字やら何やら書きつけていたという。イースター（復活祭）に使う卵である。復活祭はギリシャ正教では最も楽しい春を告げる祭で、子供たちは色とりどりの卵をもらって喜んだものだ。豊吉さんはその日その卵を誰に渡すつもりだったのだろうか。

## おわりに

五日市憲法起草に当り、千葉卓三郎の助手兼パトロン役をつとめた深沢権八は若くして死に「権八深沢氏墓」を残した。この墓前に立つと、明治初年の文明開化の風が吹く。だがヨーロッパ文化受容の度合からいえば「私の墓はいらない」といった豊吉さんの方が深く重い。

今回の調査に当り豊吉さんはじめ信徒方の内面を知りたいと願ったが、資料に接しなかった。ただ一つ信仰の実態を窺わせるものとして冒頭写真のアイコンが見つかった。石動神父によれば、これは有名な「ウラジミールのアイコン」の模写で、もちろんロシアからの渡来品であるという。頬の色も鮮やかなテンペラ画のマリアはいかにも上品で愛らしい。木出しや養蚕を仕事とする人々が、山奥の教会で美しい異国の母子像を囲む情景は「かくれキリシタンのマリア信仰」を連想させる。それは伝統習俗との対決というより伝統習俗を回避して、新しい舶来の習俗の下で法悦を得ている図である。残念ながら軍道のギリシャ正教団は信仰を再生産させる力がなく衰滅していったが、これは時勢のせいばかりではない。酷ない方だが、個々の信徒がきびしい内的自覚にもとづく信仰に達していなかったからではあるまいか。習俗と習俗との競合なら、伝統の古い方が勝つにきまっている。

最近スエさんにとって小姑に当る亡夫顯氏の妹アイさんが亡くなられた。死の床でしきりに十字をきるアイさんを見て尋ねるスエさんに、「こうすると楽になる」と答えたという。豊吉さんの最後の孫娘アイさんの死は、辛うじて残った「軍道新習俗」の終りといえようか。

（本稿は主に海老名幹雄氏の熱心な探求の結果判明した事実によるものである。同氏ならびにご教示をいただいた石動神父、山本学氏、またご親切に多くを語って下さった関係者各位に深く謝意を表す。最後にこれらのことが今後興味本位に取扱われ、ご遺族を乱すことのないようお願いしたい。 石井道郎）